



カメラ探訪

文学のふるさと

その25 多良木町

灰色の動機

— 鮎川 哲也 —

「川というよりも、両側をコンクリートで固めた姿は人工的な溝と呼んだほうがふさわしい。水量は豊富らしく……」。

多良木駅からまっすぐ東方に歩き、町をぬけると、しの子が見たという百太郎溝につき当たった。百太郎溝は多良木町の中央部付近を流れる農業用水である。

鎌倉末期から江戸中期までにおよび難工事の末ようやく完成したものである。堰の人柱となった百太郎や相良藩政時代の農民の苦労は今や見ることもできない。ただ堰のかたわらにある百太郎松が住時のことを物語るかのようであった。

水は少なかったが朝霧の中で百太郎溝はしずかに流れていた。



熊本県八代郡泉村立泉第六小学校 六年 白石宏成

ぼくの住んでいる泉村は、熊本県の南東部八代郡の東部に位置し、東西二十五キロ、南北十七キロの長方形をした、県内でも二番目の広大な山村です。泉村の東部は、久連子、椎原、仁田尾、葉木、樺木の五つの集落からなる五家荘と呼ばれている所です。久連子鶏は、天然記念物の珍しい鶏で、その羽根は古代踊りの笠に使われています。

この踊りは、久連子臼太鼓踊りといふ県指定民俗になっています。樺木にある吊橋は、兩岸の樹木を利用して作った名物の橋で、長さ七十五メートル、川との高低が三十五メートルもあります。この橋を渡るときは、橋がゆらゆらゆれるので、こわい感じがします。ぼくの学校の近くの、せんだん轟の滝は、高さ約六十五メートルあり、まわりには珍しい高山植物もたくさんあります。五家荘の周囲には、高い山がそびえ、山の斜面には、やき畑がてんとあります。ここでは、そばや大根、あずき、なば、竹の子、ひえなどを作っています。北方には、海拔千三百四十四メートルの雁又山があり、五家荘を一望にながめることができ、周囲には原生樹が多く繁っています。五家荘は、空気がきれいで、水もすんでいて、めずらしい植物もたくさんあります。特に秋は、もみじがりや紅葉を見に、県外からも多くの観光客がきます。

冬は雪が多く、ぼくたちは、スキーや雪合戦をして楽しいのですが、大人の人は、山仕事ができなくなったり、タイヤにチェーンをはめたり、とても大変なようです。教室で勉強していると、ウグイスやキツツキの声聞こえてきたり、鳥がとびこんできたりします。ヤマメやアブラメつり、カブト虫やクワガタとりなど、楽しいことがたくさんできます。こんな自然に恵まれている所に生まれて、本当に良かったと思います。